

## 『麗気記』における鏡について

本 多 亮

はじめに

『麗気記』における鏡についての記述は、大まかに分類すると三種類ある。(一)記紀神話を論じた部分に登場する鏡(例、三種の神器)、(二)真理を体現する存在としての抽象的・観念的な鏡(例、霊鏡の正体)、(三)個々の神社の神体としての具体的・個別的な鏡(例、伊勢両宮の神鏡、以上の三種類である。今回の発表では(三)の神体としての鏡についてのみ論じる。

まず『麗気記』の作者について簡単に触れておくと、『麗気記』の本文に類出する密教用語、全巻を通して現わ

れる密教的解釈などから、作者は真言または天台系の僧侶あるいはその関係者である可能性が高い。また『麗気記』が影響を受けたとされる書物(『神道五部書』等)から推察するに、神道の世界とも深い関わりがあった者と考えられる。

そこで本発表では、正体不明の作者のことをも念頭に置きつつ、『麗気記』での鏡の記述について概観する。さらに伊勢神道との関係・影響を考慮し、『神道五部書』就中『宝基本記』と『御鎮座伝記』に記述される鏡と『麗気記』(『万鏡本縁神靈瑞器記』)に記述される鏡とを比較することに、より、『麗気記』について論じてみたい。

一、『麗気記』における伊勢両宮の神鏡

『麗気記』は、各巻でそれぞれ伊勢神宮への言及があり、ある意味で伊勢神宮に関する密教的な解説書といった趣がある。その中でも、第五巻「天照皇大神宮鎮座次第」と第六巻「豊受皇大神鎮座次第」が、内外両宮について個別に詳しく論じている（以下『麗気記』の巻数は丸数字で表す）。発表ではこのふたつの巻の説明をしたが、本稿では紙面の都合もあり、⑥「豊受皇大神鎮座次第」についてのみ論じる。まず⑥「豊受皇大神鎮座次第」における神鏡の記述を簡略に表にまとめてみた。

⑥「豊受皇大神鎮座次第」

神社	祭神	呼称	数
外宮	豊受皇大神	五六月輪五智門満宝鏡	一面
相殿(左)	皇孫尊 天上玉杵命	八葉形靈鏡 無縁円輪御靈鏡	一面 一面
相殿(右)	天兒屋命 太玉命	切金方笏御靈鏡 二輪御靈鏡	一面 一面
多賀宮	豊受荒魂神	天鏡	四十四面
土宮	大土祖神		二面

いくつか興味深い点がある。二点ほど指摘しよう。

一つめは、外宮の相殿（左右）の神鏡を全部で四面とし、祭神の中に天上玉杵命アマノヒメリクノミコトという神が挙げられている点である。これは当時の通説とは異なる見解である。『延喜式』や『神道五部書』の記載では、外宮の相殿神は皇孫尊・天兒屋命・太玉命の三神であり、天上玉杵命という神は登場しない（ただし、『御鎮座次第記』には「相殿三座」の記述箇所では「左一座、皇御孫尊」の左脇に「極秘、左二神二面不二即一座也」の傍書がある）。『麗気記』の作者は、いかなる根拠に基づきこの説を記したのか。それを明らかにすることで、作者と外宮との関係がある程度絞り込めるかもしれない。

次に二つめとして、多賀宮（外宮別宮第一位）についての記述が注目に値する。元の文を引用しよう。

摂政別宮多賀御前神

亦名泰山府君也、止由氣皇大神荒魂也、亦名伊吹戸主神也、御靈天鏡坐云々、

神宝鏡廿二面蔵之、内一面天鏡、以朱藏文形也、左右各一合、都四十四鏡表也、

神宝鏡二十二面が左右それぞれに計四十四面あり、その内の一面が「天鏡」とあるという。まず四十四面という数に不審を抱くかもしれないが、『高宮盗人闖入怪異事』（元応二年（一三二〇））の記事を参考にすれば、決して荒唐無稽な数ではないといえる。しかし数よりもさらに重要なこと

は「天鏡」の存在である。そも「天鏡」とは何か。

中世の神道説では「天鏡尊」という神が重要視された。この神は元来、記紀神話においてさほど重要な神ではなかった。『日本書紀』（神代上・第二段一書第二）には「一書曰、国常立尊生天鏡尊、天鏡尊生天万尊」と、国常立尊の子として一回出てくるだけであり、『古事記』に至っては「天鏡尊」の記述自体がない。その無名の神「天鏡尊」が、『神道五部書』においては、国常立尊の所化神とされ「三面真経津宝鏡」を铸造した神とされる。「天鏡」とは、この「三面真経津宝鏡」のことである。そして「宝鏡」三面は、外宮（内宮または吉佐宮との説もある）・荒祭宮（内宮別宮第一位）・多賀宮の神鏡のこととされる。⑤「天照皇大神宮鎮座次第」でも荒祭宮の神体の鏡を、次のように天鏡としている。

撰政別宮荒祭神〔亦名随荒天子、閻羅法王所化神、天照荒魂神、名瀬織津比咩神、〕神体鏡坐、是天鏡也、天鏡尊宝鏡是也、

⑤「天照皇大神宮鎮座次第」も⑥「豊受皇太神鎮座次第」も「宝鏡」三面のうち、二面は荒祭宮と多賀宮に当てており『神道五部書』との違いはない。残り一面については触れていない。

次に『麗気記』の他の巻を見てみよう。

## 二、『麗気記』と伊勢神道書

『麗気記』の巻の中で、鏡について最も詳しく記しているのは、⑨「万鏡本縁神靈瑞器記」である。少し長くなるが鏡に関する部分を全て引用しよう。

### 大梵天宮天体靈光

一面大自在天王心肝靈鏡、々々变成精光、々々中有五輪、各々移五色成五智、々々変坐平等天照、名豊受皇大神、是云天御中至尊也、

一輪中在五輪、是天御中至尊宝鏡、

三面天鏡尊、心月輪鏡、

一面尸棄大梵天王宝鏡、

一面光明大梵天王宝鏡、

一面世界建立金剛日輪鏡、

一面八咫鏡、八葉中在方円五位象、是天照皇大神御靈鏡座也、

一面紀伊国那草郡日前宮神靈、内侍所前神坐也、

件二面鏡者、八百万神達執天金山精金、奉鑄日像鏡也、

二面無縁円輪靈鏡、

二面切金方笏靈鏡、

件鏡四面以天香山金、葺不合尊制作也、謂撰津国与

播磨国合堺乃世<sup>天志</sup>奉鑄之云々、

二面聖武天皇宝鏡、是大梵天王兩眼化為明鏡故、  
父仏母兩眼大日頂輪、大仏開眼明鏡是也、

三面化現金鏡、豊受皇大神別宮多賀宮、坂下底津若  
根尒臈置也、

二面大和姫命、朝熊海水上<sup>天志</sup>、奉鑄白銅鏡也、内

侍所神鏡崇神天皇御宇奉鑄也、(以為神靈也、)  
以上の鏡の記述を簡略にまとめたものが次の表である。

【⑨「万鏡本縁神靈瑞器記」】

神社	祭神	呼称	数
外宮	豊受皇大神 (≡天御中主尊)	大自在天王心肝靈鏡 (≡天御中主尊宝鏡)	一面
内宮	天照皇大神	《天鏡尊心月輪鏡》 尸棄大梵天王宝鏡 光明大梵天王宝鏡 世界建立金剛日輪鏡	一面 一面 一面
内宮	日前宮神靈	八咫鏡(≡日像鏡) 日像鏡	一面 一面
外宮相殿	?	無縁円輪御靈鏡 切金方笏靈鏡	二面 二面
東大寺		聖武天皇宝鏡 (≡大仏開眼明鏡)	二面
多賀宮	豊受荒魂神	化現金鏡	三面
朝熊神社	朝熊神	白銅鏡	二面
内侍所	天照皇大神	神鏡	一面

これを『宝基本記』（神鏡坐事）と『御鎮座伝記』（神鏡座事）の二つと比較してみる。すると⑨「万鏡本縁神靈瑞器記」の鏡の記述で、『宝基本記』と『御鎮座伝記』にその記述がないものは、「天鏡尊心月輪鏡」「無縁円輪御靈鏡・切金方笏靈鏡」「聖武天皇宝鏡（大仏開眼明鏡）」の三つである。ここでは、「天鏡尊心月輪鏡」に話を絞って論を進めたい。

表を見ても明らかのように、「天鏡尊心月輪鏡」はいかなる神社の神体なのかよくわからない。外宮相殿神かもしれないが、すぐ後に「無縁円輪御靈鏡・切金方笏靈鏡」の記述があるので、その可能性は低い（ただ「無縁円輪御靈鏡・切金方笏靈鏡」を外宮相殿と判断したのは、⑥「豊受皇大神鎮座次第」の記述に依っているので、表では疑問符を付けておいた）。

「天鏡尊心月輪鏡」の三面が、「真経津宝鏡」の三面であるのは間違いないが、これは「神道五部書」に記載される「真経津宝鏡」とも、同じ『麗気記』で前の巻(⑤⑥)に出してきた「天鏡」とも合致しない。『神道五部書』の記載と違うのはまだ理解できるが、同じ『麗気記』で前の巻と重要な点で異なるのは不可解である。ひとつの可能性として作者が複数いたという事が考えられる。そう考えるなら前の巻の「天鏡」が、⑨「万鏡本縁神靈瑞器記」では「天鏡尊心月輪鏡」として、より仏教色が強まっていることの説

明もつく。

### 三、『麗気記』の影響

『麗気記』は、伊勢神道の影響を受けていると考えられるが、それでは『麗気記』を読んだ神道側の人間、たとえば伊勢の神職は『麗気記』をどう見ていたのだろうか。『麗気記』からの影響はなかったのだろうか。例として度会家行をみてみよう。

外宮の祠官度会家行（康元元年（一二五六）〜？）は、神道に関する学問的作品を多く著し、中期伊勢神道の大成者として夙に有名である。その家行の名著に『類聚神祇本源』（元応二年（一三三〇））がある。全部で十五巻から成り伊勢神道思想の集大成ともいえる著作である。第十五巻を除けば、その中身は多くの文献からの抜粋により構成されている。その中で第十四巻「神鏡篇」は、各書物の神鏡に関する記載を集めたもので、家行の神鏡観を知るのに非常に有益な巻である。

その「神鏡篇」に引用されている書物は以下の九点である。

(一)麗気記、(二)天地麗気府録、(三)大田命伝神記「伊勢二所皇大神宮御鎮座伝記」、(四)阿波良波命伝神記「天照坐伊勢

二所皇太神宮御鎮座次第記」、(五)灌頂天女伝、(六)天照坐二所皇大神正殿観、(七)伊勢大神宮瑞柏鎮守仙宮秘文、(八)大和葛城宝山記、(九)豊受皇大神継文。

なかには「灌頂天女伝」のように現在では『類聚神祇本源』にしか伝承されていない書物もある。このうち『麗気記』と『天地麗気府録』の記述で、「神鏡篇」は半分以上が占められている。『天地麗気府録』からの引用は三ヶ所あるが、いずれも『麗気記』との異同を示すために数行引かれているだけなので、実質的には『麗気記』の記述を中心に「神鏡篇」は成り立っているといえよう。

ちなみに『麗気記』からの引用は、③「降臨次第麗気記」、④「天地麗気記」、⑤「天照皇大神宮鎮座次第」、⑥「豊受皇太神鎮座次第」、⑧「神梵語麗気記」、⑨「万鏡本縁神靈瑞器記」の六つの巻にわたっている。特に、⑨「万鏡本縁神靈瑞器記」からの引用は「神鏡篇」の冒頭に置かれており、家行が重視していたことを窺わせる。

家行は、『麗気記』を中心に成り立っている第十四巻「神鏡篇」を特別に重要な巻と考えていた。奥書には次のようにある。

丁丑秋九月於勢州宿館、以外宮三祢宜家行神主本（乎）書之、此鈔十五巻先以写畢、於当巻者、依秘中秘、為別巻、奏覽之時留之、適經廻当国之間、

為<sub>レ</sub>結縁<sub>レ</sub>聽<sub>レ</sub>一見<sub>レ</sub>之由、所<sub>レ</sub>相談<sub>レ</sub>也、因密々写留、更  
不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>他見<sub>レ</sub>云々、

もし「於<sub>レ</sub>当卷<sub>レ</sub>者、依<sub>レ</sub>秘中秘<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>別卷<sub>レ</sub>、奏覽之時留  
之<sub>レ</sub>」との一文が事実ならば、皇族（後宇多上皇）にさえ見  
せなかつた「秘中の秘」の巻ということになる。

これらのことから、『麗氣記』は神宮内の人にも影響を  
与えた可能性がきわめて高い。その影響がいかなるもので、  
またどの程度に及んでいたのかについての解明は、今後の  
課題としたい。

（大正大学総合佛教学研究員）